シリーズ たむら 人郷夢 ストーリー Vol.7

このコーナーでは、まちづくりなどの活動に取り組んでいる市民の方やグループにお話を伺い、活動内容や活動にかける思いをシリーズで紹介します。

和太鼓演奏で多くの人々の胸に感動を刻み続けている「大越町鬼五郎幡五郎和太鼓保存会」。平成2年に発足して以来、奥州猿羽根流の伝承に研鑽を重ねながら、和太鼓全国大会や市内外のイベントなどでの演奏活動に熱心に取り組んでいます。の中心となって活躍されている会長の湯佐清光さんに、活動への思いを伺いました。

地域活性化の原動力になる

平成2年、旧大越町のふるさと創生事業の一つとして、創作太鼓を始めました。地域づくりは人づくりと言われているとおり、人と人との触れ合いによる融和・協調・連帯を最も大切にする心をつくろうと考えたのです。会の名前は、大越町に残る鬼五郎・幡五郎兄弟の伝説にちなんで「大越町鬼五郎幡五郎和太鼓保存会」と命名しました。勇壮な太鼓は、過疎化から脱却するための起爆剤として、地域活性化の原動力になると期待され、活動がスタートしました。

大越町鬼五郎幡五郎和太鼓保存会の皆さん
前列中央が会長の湯佐清光さん（大越町上大越）

大越町鬼五郎幡五郎和太鼓保存会…平成２年、旧大越町のふるさと創生事業として始まった和太鼓演奏のグループ。名前は坂上田村麻呂に対抗した兄弟の名にちなむ。奥州猿羽根流（下参照）の龍連山氏に師事。曲目は「祭り太鼓」「鳴神太鼓」「鬼面太鼓」のほか、平成21年に田村市の自然をイメージして作曲した「田村嵐」がある。市内外のイベントに積極的に出演し、地域づくりだけでなく市のアピールにも寄与。大太鼓には保存会のテーマ“夢心”が刻まれている。

奥州猿羽根流…水舞流（福井県）と助六流（東京都）を修めた宗家・龍連山が独自の大太鼓奏法をアレンジして興した和太鼓流派。観せて聞かせ、聞かせて観せる打芸の太鼓は、外務省の要請で海外公演をするほど世界的に評価を得ている。

▲法螺貝を吹く湯佐会長

テーマは〝夢心〟

初期のメンバーは19人で、全員が太鼓を叩いたことがありませんでした。

そこで、山形県の奥州羽根流の龍連山先生に指導いただくことになりました。月2回、先生に指導いただきながら、先生創作の「祭り太鼓」「鳴神太鼓」「鬼面太鼓」の3曲を、週3回、大越町武道館（旧娯楽場）で本格的に練習しました。

しかし、スムーズに進んだわけではありません。勇壮な太鼓に仕上げるため、しばしば編曲がありました。太鼓の音がうるさいと苦情を言われたこともあります。

それでも私たちは、練習に明け暮れました。太鼓を演奏するテーマが明確になり、迷いが吹っ切れたからです。

そのテーマは〝夢心〟、つまり夢を伝えることです。

そして平成3年7月、「鬼の里納涼夏まつり」で、初めて町民の皆さんに演奏を披露しました。観賞した人から「勇壮なリズムとバチさばきに驚いた」「鬼伝説の里 おおごえの太鼓として自慢できる」と好評をいただき、深く感動したのを覚えています。

▲活動を始めたころ、大越町武道館で

復興の響きに

平成23年の東日本大震災では活動を自粛しましたが、被災者を励ましたい思いから、8月には活動を再開しました。

和太鼓の歴史は古く、縄文時代にはすでに、情報伝達の手段として利用されていたといいます。今日では、雅楽や歌舞伎で重要な役割を果たしているほか、日々の暮らしの中に身近なものとして溶け込んでいます。

また、最近では、和太鼓を演奏すると脳が活性化するとの研究結果もあるそうです。

活動を始めてから今年で25年――私たち保存会は、地元の田村市はもとより、市内外のイベントや太鼓フェスティバルなどにも参加してきました。和太鼓の響きがこれまで以上に感動や感激を与え、脳だけではなく地域も活性化するよう、これからも太鼓を叩き続けていきたいですね。私たちが叩く和太鼓の響きが復興に寄与すれば、これほどうれしいことはありません。

▲あぶくま洞秋まつりのステージに出演

取材を終えて

心を無にして、ひたすら和太鼓を叩く練習風景。会員が振るうバチには、彼らの汗や血が絆となって沁み込んでいるようでした。

保存会のメンバーは現在18人で、発足時から残っているのは湯佐さんを含めて3人。多い時は30人ほどいましたが、田村市が誕生する直前には5人まで減ったそうです。今では、大越町はもちろん、船引町や都路町、さらには小野町の会員もいるそうです。20代から30代のメンバーが主力となり、若い人が引き継いでくれてうれしいと湯佐さんは話しました。これからは若い世代がリーダーとして指導できる体制を整え、〝夢心〟のロマンと心を伝える保存会にしたいとのこと。湯佐さんは笑顔で和太鼓の未来を見つめていました。

（協働まちづくり課）